

# 子どもの「リズムあそび」における保育者の関わり

大岡 徹 洋                      木 許      隆  
安城市立二本木保育園      岐阜聖徳学園大学短期大学部

## The relationship of childcare providers to a child's "Rhythm Play"

Testuhiro OOKA, Takashi KIMOTO

キーワード：保育 身体表現 音楽表現 リズム

### I. はじめに

子どもと音楽を通したあそびを展開する中で、音楽に合わせた動きや音楽に合わせた歌い方を求める保育者は多いのではないだろうか。しかし、音楽に合わせて子どもたちが親しんでいる動物になったり、動物の動きを模倣したりする保育を展開している保育者は少ないのではないだろうか。なぜなら、日々の保育の中で、前述した活動を展開することは時間的な制約があると考えられるからである。

本研究を進めるにあたり、先行研究として山田ら（1991）が、歌あそびやリズムあそびの指導計画を立てる実践や評価についての方法などを論じていた<sup>1)</sup>。また、木許（2009）が、保育現場における歌あそびやリズムあそびの現状を論じていた<sup>2)</sup>。しかし、本研究のように現職の保育者と保育者養成校の教員が、子どもとの関わりを中心とした共同の研究は希少であると思われる。

筆者たちは、知的障害児通園施設および保育所における勤務経験や、保育者養成校における勤務経験を通して、子どもが生き生きと活動する姿を目にしてきた。そして、本稿では、保育所に通う4歳児を対象とした「リズムあそび」の実践を報告したいと考えた。

### II. 研究目的

本研究の目的は、保育者が演奏するピアノに合わせて、子どもたちの自発的に表現を導き出すことおよび子どもの表現によって、骨格や筋肉の発達、感覚神経や運動神経の発達を促す実践を行うことである。そして、子どもたちがリズムにのって遊ぶ中で、全身のバランス感覚を身につけていくことへと発展させたいと考えた。

### III. 研究方法

保育所Aにおいて4歳児28名を対象とした実践を行う。そして、子どものあそびの中に含まれる効果を以下の①から⑤のカテゴリーに分類し、それらがどのように各機能の発達に関わるか観察した（表1）。

表1：あそびの中に含まれる効果

- |                       |
|-----------------------|
| ① 腕で身体を支えることができる      |
| ② 腕と足が異なる動きになる        |
| ③ 良い姿勢を保つことができる       |
| ④ つま先で蹴り、足首で支えることができる |
| ⑤ 首を持ち上げ、頭を支えることができる  |

### IV. 研究内容

以下の実践は、まず子どもが保育者の見本に対して模倣することから始まっている。そして、実践をくり返す中で子どもが音楽を理解し、その音楽に合わせて表現することができるよう指導した。また、保育者が演奏するピアノは、簡易伴奏を基本とした楽譜を使用した。

### 1. どんぐり (寝返りをする)

正座した状態から音楽に合わせて左右へ転がり始める。その時、転がる方向は一定の方向とする。この動きには、④、⑤の要素が大きく関わる。(譜例1)

♩=88

譜例1

### 2. わに (腹這いで前へ進む)

正座した状態から音楽に合わせて腹這いになり、四足を使って前へ進む。その時、両手のひらを床に付け、足の親指で蹴る。この動きには、①、④の要素が大きく関わる。(譜例2)

♩=98

譜例2

### 3. うま (高這いになり前へ進む)

正座した状態から音楽に合わせて四つ這いになり、四足を使って前へ進む。その時、両膝を床に付け、足の親指で蹴ることにより高這いの姿勢へと発展する。この動きには、①、④、⑤の要素が大きく関わる。(譜例3)

♩=92

譜例3

### 4. くま (身体を四肢で支えて前へ進む)

正座した状態から音楽に合わせて四肢で支え前へ進む。その時、腰を高く上げ四足を床に付け、足の親指で蹴る。この動きには、①、④、⑤の要素が大きく関わる。(譜例4)

♩=92

譜例4

### 5. あひる (しゃがんで前へ進む)

正座した状態から音楽に合わせてしゃがんだ状態を保ち前へ進む。その時、両腕は後方に張り出し、足の指で身体を支える。この動きには、③、④、⑤の要素が大きく関わる。(譜例5)

♩ = 102

譜例 5

### 6. うさぎ (両足を揃えて跳ぶ)

正座した状態から音楽に合わせて、両足を揃えて軽く跳ぶ。その時、両腕は高く伸ばす。この動きには、②の要素が大きく関わる。(譜例6)

♩ = 144

譜例 6

### 7. めだか (素早く走る)

正座した状態から音楽に合わせて、素早く走る。その時、両腕は前に伸ばし手のひらを合わせる。この動きには、②の要素が大きく関わる。(譜例7)

♩ = 150

譜例 7

### 8. とんぼ (素早く走りバランスをとる)

正座した状態から音楽に合わせて、両腕を広げて腰を回す。そして、両腕を広げたまま走る。また、音楽に合わせて減速し、最後は片足立ちとなる。片足立ちは、利き足で立ち、もう一方の足を後方へ引くことによってバランスをとる。この動きには、②、③、⑤の要素が大きく関わる。(譜例8)

譜例 8

♩=98

♩=156

*last time poco a poco rit.*

### 9. きしゃ (全力で走り滑り込む)

正座した状態から音楽に合わせ、両腕を回しながら全力で走る。その時、肘の関節を曲げ、車輪が動くことを模倣する。そして、音楽に合わせ床に腹這いになり滑り込む。また、2つの動きをくり返す。この動きには、③、⑤の要素が大きく関わる。(譜例9)

譜例 9

*poco a poco accel.*

*stringendo*

## V. 研究結果

1. どんぐり (寝返りをする) において、子どもは手足を使わず重心を移動させ左右に転がった。そして、④の観点からつま先で床を蹴るよう援助することによって④の効果が見られた。また、仰向けからうつ伏せに移る際には⑤の効果が見られた。

2. わに (腹這いで前へ進む) において、子どもは肘や膝で身体を支え前進した。①の観点から手のひらを床につけるよう援助することによって①の効果が見られた。また、④の観点から足の親指を床につけるよう援助することによって④の効果が見られた。

3. うま (高這いになり前へ進む) において、子どもは膝からつま先までを床につけ前進した。④の観点から足の親指を床につけるよう援助したが、つま先で床を蹴ることはできなかった。しかし、この姿勢をとるところから①、⑤の効果は見られた。

4. くま (身体を四肢で支えて前へ進む) において、子どもは身体を四肢で支えることができず、腰の位置が下がったり、身体が左右に揺れたりして転倒する場合もあった。しかし、保育者が腰を支える援助をくり返し行うことによって、子どもの身体は安定した。これにより①の効果が見られた。また、この姿勢をとるところから④、⑤の効果は見られた。

5. あひる (しゃがんで前へ進む) において、子どもはしゃがんだ姿勢はとれるが、前進する際に床へ手をつき上半身を支えていた。③の観点から保育者が子どもの手を取り援助することによって③の効果が見られた。そして、⑤の効果も十分に見られた。また、④の観点から踵をあげるよう手を添えて援助したが、つま先で身体を支えることはできなかった。

6. うさぎ (両足を揃えて跳ぶ) において、子どもは両足を揃えて跳ぶことができた。②の観点から両腕を高く伸ばすよう援助することによって②の効果が見られた。

7. めだか (素早く走る) において、子どもは両腕を前へ伸ばし手のひらを合わせた状態で走ることができた。また、この姿勢をとるところから②の効果は見られた。

8. とんぼ (素早く走りバランスをとる) において、子どもは両腕を広げて腰を回すことや、両腕を広げたまま走ることができた。③の観点から保育者が子どもの腕を支持し援助することによって、片足立ちすることはできた。しかし、もう一方の足を後方へ引き、身体のバランスを取って立つことはできなかった。また、この姿勢をとるところから②、⑤の効果は見られた。

9. きしゃ（全力で走り滑り込む）において、子どもは車輪の模倣や腹這いになり滑り込むことができた。また、この姿勢をとるところから③、⑤の効果は見られた。

## VI. 考察

研究結果から、5つのカテゴリーがどのように関係しているのか考察する。

「①腕で身体を支えることができる」は、3つの動きの中に該当している。子どもが腹這い、高這い、四肢で自らの身体を支えるには、腕の筋力のもとより手のひらを十分に床につけることが不可欠であると考えた。そして、本研究に用いた動きのほかにも①の効果を引き出すことができる動きを考案しなければならないと考えた。

「②腕と足が異なる動きになる」は、3つの動きの中に該当している。子どもが腕を動かすことについては、保育者による小さな援助や反復練習などにより効果を引き出すことができる。しかし、腕の動きを止めることについては、腕の筋力の発達が不可欠であると考えた。

「③良い姿勢を保つことができる」は、3つの動きの中に該当している。特に、「5あひる」、「8とんぼ」では、保育者が子どもの腕を支持することによって、子どもが良い姿勢を保つことができた。このことから、この頃の子どもには、保育者の援助によって完成される動きがあるのではないかと考えた。つまり、子どもの発達段階を踏まえた保育者の援助が不可欠であると考えられる。

「④つま先で蹴り、足首で支えることができる」は、5つの動きの中に該当している。特に、「3うま」では、保育者が子どもの足に手を添えながらつま先を立てるよう促したが、つま先で床を蹴ることは難しかった。また、「5あひる」では、保育者が子どもの足に手を添えながら踵をあげるよう促したが、つま先で身体を支えることはできなかった。これらのことから、子どもの足の親指や足の裏の機能が十分に発達していないように感じた。④を含んだ動きをくり返し、子どもが遊ぶことによって、足の親指へ注意をはらうことができるように促したいと考えた。

「⑤首を持ち上げ、頭を支えることができる」は、6つの動きに該当している。これは、子どもの発達段階において重要なことであると考えるが、4歳児においてはほぼ完成されたものとなっていた。

以上のことから、以下の動きについて検証できるのではないかと考えた。

(1) ①、②の要素を大きく含んだ動きとして、うつ伏せの姿勢から腕を立て、腕の支持力を持って前進する動きが考えられる。この動きを実践するには、まず、うつ伏せの姿勢から上半身を後方へ反り、腕の力のみで前進することが必要となる。この場合、足は親指を立てず、2本の脚は閉じた状態を保つことにも留意しなければならない。

(2) ①、③の要素を大きく含んだ動きとして、2人1組になり手押し車を模倣する動きが考えられる。この動きを実践するには、一方の子どもが床に両手をつき、もう一方の子どもがその子どもの両足首または両膝を支持する。そして、前者が手を交互に出して前進することが必要となる。この場合、手の指を十分に開き、床を握るような状態にすること、子どもが自らの体重を支えることができる状態であること、両足首を支持する子どもが他人の体重を支えることができる状態であることに留意しなければならない。

(3) ②、④の要素を大きく含んだ動きとして、背の高い動物を模倣する動きが考えられる。この動きを実践するには、両腕を高く伸ばしつま先立ちで歩くことが必要となる。この場合、前進のみならず多方向へも動くことができるよう援助しなければならない。

その他、「2わに」の動きでは、身体をくねらせて前進すること、「5あひる」の動きでは、踵をあげ前進することなど、子どもの発達にともない完成される動きが多く見られた。

## VII. まとめと課題

筆者たちは、子どもの運動機能や精神的な発達を日々の保育の中で願っている。そして、子どもと寄り添うことによって、発達を促す方法なども考えていかなければならない。特に、足の指の動きや協同運動などは、日々の実践の中で意識しにくい部分であると言っても過言ではない。しかし、子どもの発

達には不可欠な運動であることも現場を知るものとして理解できている。

本研究において、筆者たちが身体的な表現についておよび運動あそびの可能性について研究しなければならないという課題も見えた。しかし、子どもの表現に関わる動きおよび身体の部位の発達を促す項目などが明確に理解できたように感じている。今後、保育の援助方法を高めることに繋ぐことのみならず、あそびの中で子どもをどのように導いていくのかを考えなければならないということも理解できた。

### 注・文献

- 1) 山田規美江他 (1991) : 「集団性を高めるための「あそび」の指導 : 合同学習を通して」, 情緒障害教育研究紀要 10, 73-82
- 2) 木許 隆 (2009) : 「保育現場における音楽活動ーその2 5歳児におけるマーチング導入法ー」, 埼玉純真短期大学研究論文集 (2), 53-58

### 参考文献

- 1) 斎藤公子 (1997) : 「改訂版さくら・さくらんぼのリズムとうたーヒトの子を人間に育てる保育の実践 (第3版第2刷)」, 株式会社群羊社, 東京
- 2) 前橋明 (2014) : 「0～5歳児の運動遊び指導百科 (第16版)」, ひかりのくに株式会社, 東京
- 3) 丸山美和子 (2008) : 「リズム運動と子どもの発達 (第5版)」, かもがわ出版, 京都